

## インフルエンザとコロナ

✦ 文 岩本耕太郎 text by Kotaro Iwamoto ✦

今年夏場からインフルエンザが猛威を振るっており、感染の主体は若い人で学級閉鎖などもみられています。例年だとインフルエンザは寒くなつてから流行するはずなので、今年は異例といつていいでしょう。

4年前に新型コロナが流行してからのというもの、世界と同様日本でもインフルエンザの流行は見られませんでした。専門家はウイルス間干渉によつてインフルエンザが流行れなくなったのだと説明しました。ウイルスの世界にも生き残りの勢力争いがあるので

す。結果的に2020年から2022年まで我々はインフルエンザの患者さんを診ることはまったくありませんでした。ですから今年のインフルエンザの流行は我々にとつても驚きだったのです。これはウイルス間干渉で今まで負けていたインフルエンザがコロナを凌駕した可能性を示唆しているからです。

コロナウイルスの毒性はオミクロン

株に変異してからは劇的に弱くなりました。コロナ感染によつて肺炎が重症化した際に装着するECMOという人工肺もオミクロン以降、装着された人はほとんどいませんでした。インフルエンザがコロナに対して優位になったのは必ずしもコロナが弱毒化したからではなく、インフルエンザそのものが強くなった可能性は否定できません。いずれにしろ約百年前に猛威を振つたスペイン風邪も3年で終息しており、ほぼ同じようにウイルスの交代現象が起こつたと想定されます。

今年のインフルエンザは未成年を中心に例年より3、4カ月流行が早く訪れています。実は2022年のオーストラリアでも例年より3カ月早く同じように未成年を中心にインフルエンザが流行しました。その結果新型コロナウイルスの発生数は一日当たり5万人から4カ月で1800人に激減し、現在700人まで落ち着いてしまっています。今の日本の状況は去年のオーストラリア

と非常に酷似しており、実際に11月現在インフルエンザとコロナの新規感染者数は6対1程度と圧倒的にインフルエンザ優位になっています。うまくいけば来春には長かったコロナとの闘いがようやく終わりを迎えることになるのです。



## profile

帝国クリニック院長

1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。

山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。

サーフィンとクラシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。

著書に『患者さまが増える』（H&I出版）、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』（中経出版）